2023年度 裁判所事務官（一般職）本試験（基礎能力試験）　講評

No.	科目	出題内容	正解	正答率※
1	文章理解（現代文）	内容把握	2	A
2		内容把握	4	A
3		内容把握	4	A
4		空欄補充	3	A
5		文章整序	2	A
6	文章理解（英文）	内容把握	4	A
7		内容把握	5	A
8		内容把握	5	A
9		文章整序	3	C
10		空欄補充	4	B
11	数的処理（判断推理）	論理（論理式）	3	A
12	数的処理（数的推理）	文章題	2	A
13		整数解	5	C
14	数的処理（判断推理）	順序関係	5	A
15		対応関係	1	A
16		真偽	2	B
17		平面図形の分割・構成	2	A
18		位置関係	3	A
19		正多面体	5	B
20		位相	1	B
21	数的処理（数的推理）	文章題	4	A
22		文章題	3	A
23		速さ	5	A
24		場合の数	1	B
25		確率	3	A
26		平面図形の計量	2	B
27	数的処理（資料解釈）	表（実数・構成比）	4	A
28	社会科学（政治）	日本の地方自治	2	A
29	社会科学（政治）	難民・民族問題	1	B
30	社会科学（経済）	金融の仕組み	1	B
31	社会科学（経済）	日本の社会保障	4	A
32	社会科学（法学）	法の体系、種類	4	B
33	人文科学（日本史）	第一次世界大戦中から戦後の日本社会	3	A
34	人文科学（世界史）	ルネサンス	4	B
35	人文科学（地理）	ﾗﾃﾝｱﾒﾘｶ	5	A
36	人文科学（地理）	現代西欧思想	1	A
37	自然科学（物理）	電流と電圧	3	C
38	自然科学（化学）	混合物の分離	5	A
39	自然科学（生物）	心臓と血液循環	2	A
40	自然科学（地学）	大気圏	5	B

講評

【文章理解】　現代文：例年どおり、内容把握３題、空欄補充１題、文章整序１題の計５題の出題であった。内容把握の３題と比べて、空欄補充、文章整序は難易度が高かった。特に空欄問題は迷った受験生も多かったと思われるが、本文前半部分を要約することで正解肢にたどり着ける問題であった。

【文章理解】　英文：昨年までは、内容把握３問、文章整序１問、空欄補充１問であったが、今年は内容把握が１問減り、その分No.８で本文の例えから筆者の主張を読み取るという、これまでにない問題が出た。本質的には要旨把握に近い問題であり、難問ではないが、見慣れない問題形式のためどのように手をつけてよいのかわからずに苦しんだ受験生が多かったと思われる。この問題の正答率は６割程度と高くはなかったが、文章整序と空欄補充はさらに難易度が高いことから、No.８はなんとか正解させたい問題であった。

【数的処理】　判断推理：今年の出題数は空間図形を含め８題で、難易度は昨年並みであった。近年出題された操作手順の問題のように時間が掛かるという問題もなく、多くの受験者にとって数分で解けた問題が多かった印象を受ける。No.15 と No.16 については場合分けを必要とするため時間を要したが難易度としては標準的であった。No.15 については青のカードを渡した人がＡであるとわかること、No.16 については誰が２回目で勝ったかについて場合分けをすることがポイントであった。No.17 が今年の判断推理の中で最も複雑な問題であっただろう。図形を入れたときに、Ｍの空白の領域が２つに分かれないように埋め込むことがポイントであった。No.19 は切頂八面体の問題であったが、過去問解きまくり②「判断推理・図形」問題 111 にも似たような問題があったことから解けた受験者も多かった印象を受ける。

数的推理：今年の出題数は図形の計量も含め８題で、難易度は昨年より易化した。２年前と昨年は複雑な場合の数の問題が全体の難易度を上げていたが、今年の問題は多くの受験者にとってNo.13 を除いてはKマスターレベルの問題が多くあったので、得点することができたであろう。No.13 はまずNの十の位をａ、一の位をｂと置いて、（ａ＋１）（ｂ＋１）＝10ａ＋ｂを満たすａとｂの自然数解を求めるとＮ＝18 とわかる。そして、18 を２つあるいは３つの自然数の積で表すことがポイントであった。残りの数的推理の問題については、Kマスターレベルの問題で、時間を短縮できた受験者が多かったかもしれない。また、No.26 の図形の計量は、近年角の二等分線に関する問題が出題されていたため、きちんと過去問演習をやっていた人は解くことができた易しい問題であった。特に、No.21 から No.25 はKマスターレベルの問題が並んだことにより、この５題で点数が取れたかが試験突破の鍵になったのではないか。

資料解釈：資料解釈は例年どおり１題出題された。例年どおりの基本的な問題であった。正答を得るための選択肢の検討順は後ろのほうであったが、実数×構成比の合計を求めるように計算に時間を要する問題ではなかったため、根気強く解いて１点取りたい問題であった。

【社会科学】　地方自治、金融の仕組み、法の体系・種類からの出題であった。地方自治は、典型的な問いばかりなので、確実に得点源としておきたい問題といえる。金融のしくみは、いずれの選択肢も平易なので正解しておきたい問題である。法の体系・種類は、裁判所職員の試験では法学概論は頻出テーマなので、裁判所職員の志望者ならば準備をしていたはずである。いずれの問題も基本レベルなので、３問すべて正解しておきたい。

【人文科学】　裁判所職員の基礎能力試験は、従来、かなり難易度が高かったが、今年の問題は全般的に易化し、いずれもオーソドックスな問題であった。世界史の正答率がやや低いが、ミケランジェロの「アテネの学堂」がテキストに掲載されていないためであると思われる。肢Ｃを選択した人にお詫びしたい。思想は近年、ロールズやアーレントがよく出題されている。来年度以降に受験をする人は十分に注意をしておきたい。

【時事】　難民・民族問題、社会保障の２問が出題された。難民・民族問題は、社会科学の知識や一般常識の範囲でも選択肢を絞り込むことができるうえに、最近の動向を把握できていなくても正解肢を見出せる問題である。社会保障は、社会科学の知識でも正解肢を導ける平易な問題といえる。いずれも基本レベルから標準レベルの問題なので、２問とも正解しておきたい。

【自然科学】　近年の傾向として、基礎的知識を問われることが多くなっているが、本年はやや細かな知識も問われていた。以前は、記述の正誤の組合せを問われることが多かったが、2019 年を最後にその出題形式はなく、２つの正解肢の組合せを問う形式となり、昨年同様、本年も３問であり、残りの１問は１つの正解肢を選ぶものであった。
No.37 は、電流と電圧について、具体的な場面を意識しながらイメージができていることが大切である。No.38 は、混合物の分離について問われ、やや細かい用語も見られたが、誤肢がわかりやすかったため、正答率は高かった。No.39 は、心臓と血液循環について問われたが、基礎的知識であり、正答率は高かった。No.40 は、大気圏について問われたが、肢Ａは、正しくは、「対流圏、成層圏」の順番のため誤りであるのだが、意外と正しいと判断してしまった受験生が多かったようで、正答率は伸び悩んだ。

※　正答率（Ａ：60%以上、Ｂ：40%以上 60%未満、Ｃ：40%未満）は、ＬＥＣ公務員試験 受験生応援企画『本試験無料成績診断』のデータ（5/24 12：30 時点）に基づいて算出しています。本成績診断のご利用方法等の詳細は、ＬＥＣ公務員 Web サイトの専用ページ（https://www.lec-jp.com/koumuin/juken/seiseki/）にてご案内しています。

LEC東京リーガルマインド　公務員試験対策　複写・頒布を禁じます

0 001112 227224
KL22722